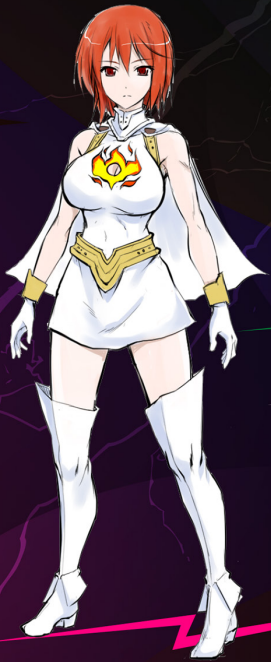
二次元ドリームノベルズ
18
未満
サンダークラップス！リボーン
THUNDER CLAPS! REBORN
ウォッチランド
試し読み版
羽沢向一
挿絵：緑木邑

ローズデバイス Rose Device

「サンダークラップス」の一員。
清楚可憐で色白な美少女。
亡父の実験中の事故により、幼いころに重傷を負い、
体内にナノマシンを入れている。
今作では機械の甲冑「ブレイブグレース」を装着して
闘う。



フレア Flare

「サンダークラップス」の一員。
凛とした力強い美女。
悪の科学者ドクター・ディスオー
ダーに創られた人造人間。
頑強な肉体と怪力を持つ。

サンダークラップス! リボーン
CHARACTERS ウォッチランド

Contents

第一章
異世界に転生したらヒーローから勇者
001

第二章
恐怖に犯される
037

第三章
異世界勇者の絶頂パレード
094

第四章
雲霞をなす陵辱
111

第五章
体液まみれの正義
143

スターサンダー

Star thunder

スーパーヒーローチーム
「サンダークラップス」のリーダー。
端正で気品のある大人の美女。
地球人の母と宇宙人の父を持つ混血
のミュータント。
電気を自在に操る能力を持つ。

オセロット

Ocelot

「サンダークラップス」の一員。
猫科の猛獣の雰囲気を持つ陽気な
美女。
南米の自然の精霊たちに認められた
シャーマンで、精霊の力を宿して
ジャガーの獣人に変身して魔法を
使う。

Attention

ウォッチランド

Watch Land

巨大な城壁に囲まれた異世界の町。
来る災厄に対抗するため、ローズデバイ
スはここに勇者として召喚された。

第一章　異世界に転生したらヒーローから勇者

北原静子（きたはらしずこ）は銀座のガラス工芸品の老舗店の中を、時間をかけて歩いた。

お気に入りの水色のワンピースに白い靴。左手には、いつものように若い娘にはあまり似合わない黒いアタッシュケースの取っ手をしっかりと握っている。

今日はひとりで自分の部屋に飾る花瓶を買いに来たのだが、目的の花瓶だけでなく様々なガラス製品の華やかな輝きに目移りしてしまう。

（花瓶の他にも、なにか買おうかしら）

私室には仕事用の電子機器と生活必需品しか置いていないのだが、ガラス細工には幼いころから心が引かれる。コレクター気質ではないので、部屋に飾っておくのは二、三個だからこそ、しっかりと選んで買いたい。

棚に並ぶ精巧なガラス細工のライオンや象など、アフリカの動物をながめる。

（ベルさんなら動物の置物を選ぶよね。あたしならこれ）

足が止まったのは、透明な大小の直方体をいくつも組み合わせたオブジェの前。同居している三人からはよくわからないと言われるが、具象作品よりも抽象作品が好みだ。

（ちょっと値段が高い。でも欲しい……）

財布にあるクレジットカードを使えば簡単に支払える値段だが、高額商品をホイホイ買うことには抵抗がある。脳内で数秒の葛藤をした後に、静子は決意した。

「よし。買っちゃおう！」

店員に声をかけようとしたとき、脳に警報が響いた。静子の脳は、静子の意識とは別に無数に飛び交う電子情報の中から必要なものを選び出して、意識に知らせてくる。意識にいくつものツイッターやＬＩＮＥの画面が現れる。

（銀座で交通事故が起きてる？）

個人のスマートフォンがＳＮＳにあげている錯綜した情報なので、場所の判定ができない。静子はワンピースのポケットから四角いプラスチック製のサプリケースを出し、店内の人たちから見えないように蓋を開けた。中に整列しているのはサプリでも薬でもない。テントウムシサイズの小さな機械がいっせいに飛び立ち、人間の視力では捉えられないスピードで店舗の外へ出ていく。

道路に出た機械の虫たちはバラバラに分散して、銀座のあちこちを飛びまわり、映像と音声を集めて静子の脳へ送ってくる。

一分もかからずに、虫の一匹が事故現場を発見した。大型トレーラーが横倒しになり、

斜めになった荷台のコンテナが白い乗用車を押しつぶしている。トレーラーのドライバーが自力で車外へ逃げ出し、道路で呆然と立ちつくしている姿も見えた。しかし乗用車のひしゃげた車内では、中年女性が外へ出ようと必死になっているが、歪んだドアを開くことができない。

事故車に集まった虫たちからの情報で、位置は把握した。

静子は急いで店内の奥にあるトイレに駆けこむと、個室の中で全速力でワンピースを脱いだ。かわいいワンピースの下からは、身体にぴったりと密着する黒いボディスーツが現れる。

アタッシュケースを便座の閉じた蓋の上に置くと、指ではなく脳からの指示でロックを解除した。ひとりでに開いたアタッシュケースの中から、エメラルド色に煌めく金属片が飛び出し、自動で静子の全身に貼りつき覆いつくす。

数秒で、北原静子はエメラルドグリーンに輝くハイテク装甲服を装着したスーパーヒーロー、薔薇の装置となる。

二十歳前のハイティーンにしては小柄で華奢な静子の身体を包むアーマーは、静子よりも背が高く、金属で成熟した大人の女のボディラインを美しく描いている。顔も大人の女性をイメージした仮面に隠す。体形が異なるのは正体を消すためだが、おかげで世間では

ローズデバイスは二十代なかばの美女というイメージを持たれていた。
脳から自分の機械に直接命令を出せる静子は、オフビートだ。
オフビートとは世界中にいる人間以上の、あるいは人間とは異なる力を持つ者たち。
冷戦時代に、テロリストがアメリカへ向けて発射した核ミサイルを、ひとりの男が空を飛んで素手で捕まえ、宇宙まで運び、大勢の人々の生命を救った。
赤いコスチュームを着て、赤いマスクを被り、赤いマントをひるがえした超人は雲霞のごとく集まった記者たちへ、友人たちから超調子っぱずれ（スーパーオフビート）と呼ばれていると自己紹介した。
スーパーオフビートの出現が契機となって、世界中で超人たちが姿を現しはじめると、人々は最初のひとりにならって超人たちをオフビートと呼んだ。
オフビートの出自や能力は多種多様だった。生まれながらに超能力を持つ者。アクシデントでスーパーパワーを得てしまった者。努力して驚異の秘術や魔法を身につけた者。最初から人間ではないロボットや伝説の魔物や宇宙人などなど。
オフビートは三つに分類できる。
オフビートであることを隠して、平凡に暮らす者たち。
超能力を使って犯罪をするスーパーヴィランたち。
そしてスーパーオフビートのように人命救助や犯罪者と闘うスーパーヒーローたち。

北原静子もスーパーヒーローのひとり。

静子は幼いころに、優秀な科学者だった父の研究中の事故に巻きこまれて、次第に脳と神経が崩壊する奇妙な症状を発症した。確実に迫る死から娘を護るために、父親は自分が開発していた特殊なナノマシンを体内に注入して、娘の神経系を肩代わりさせた。静子の脳と神経は徐々にナノマシンと入れ替わっていき、やがて脳は完全にナノマシンの集合体となった。記憶や人格がナノマシンの脳に完全に引き継がれているのは奇跡といってよい。

静子は身体が生身で、脳が機械、という他に類のないサイボーグとなった。

父親の死後に、静子は若い女性三人の新人ヒーローチームのサンダークラップスと出会い、身を寄せた。そして自分が開発したアーマーを装着して、サンダークラップスの四人目のメンバーとなり、ローズデバイスというヒーローネームを名乗った。

ローズデバイスは身軽な動きでトイレの窓から外に出ると、アーマーの替わりにワンピースと靴を入れたアタッシュケースを持ち、脚部からジェットを噴射してビルとビルの間の狭い空間を垂直に上昇した。周囲のビルよりも高い空中でアタッシュケースを手から放すと、中から四つのプロペラが現れてドローンと化して自律飛行を開始する。

着替えの入ったアタッシュケースを空中に待機させて、ローズデバイスは事故現場へと飛んだ。幸いにもトレーラーが横転しているのは、すぐ近くの道路だった。一分もかから

ずに、つぶれかけている乗用車の脇に降り立つと、被害者を安心させるために、歪んだドアのウィンドウから車内を覗きこんで声をかける。

「スーパーヒーローチーム、サンダークラップスのローズデバイスです。今から救助しますので、心配しないで車内でじっとしていてください」

声はアーマーを通して、静子本来の少女のような澄んだ声から、頼りがいのある力強い声音に変わっている。運転席に座るぽっちゃりした中年女性は、何度もニュースで活躍を報じられているヒーローの姿を見て、声を聞き、安堵で気の抜けた顔を大きくうなずかせた。

「はじめにトレーラーをどかします」

ローズデバイスは周囲を飛びまわる機械の虫たちからの映像を脳で受信して、危険がないことを確認すると、金属の両手を乗用車の上にのしかかるコンテナに当てた。そのまま空中に浮かび、コンテナを押す。ローズデバイスのアーマーが出す腕力は、巨大な重機以上だ。難なくトレーラーを押し上げて、浮き上がっていた片側のタイヤをアスファルトの路面に着かせた。

中年女性のいない助手席側のドアの前に立つと、右手をアーマーの脇腹部分に当てた。なめらかな表面が開き、中からボールペンサイズの細い円筒が出てきて、指にくっつく。

円筒の先端を歪んだドアへ向けると、高速で小刻みに振動する刃が出る。
「こちらのドアを切断します。安全ですが、念のために近づかないでください」
振動する刃がドアに触れると、包丁が豆腐を切るようにやすやすと切断していく。ドアを車体からはずすと、両手を伸ばして中年女性のかなり重量のある身体を優しく引っぱり出して、道路に立たせた。
「けがはありませんか。すぐに救急車と警察が来ます」
救急車とパトカーが駆けつけてくる様子が、周囲に飛ばしている虫から送られてきている。
中年女性はなかば呆けた顔つきで、ローズデバイスの金属のマスクを見つめた。
「だ、大丈夫です。あ、あの、スーパーヒーローを生で見るのは、はじめてで、ありがとうございます」
「どういたしまして」
パトカーが到着して警官が降りると、ローズデバイスは中年女性とトレーラーのドライバーを交えて、事故と救助活動について報告した。
その間に野次馬がさらに集まって、スマートフォンで写真や動画を撮影しまくっている。ローズデバイスを呼ぶ声がいくつも重なって聞こえた。

「サンダークラップスのローズデバイスだ！」
「はじめて見た！」
「今日はひとりなんだ」
「かっこいい！」
「こっちを向いてーっ！」
歓声を浴びるローズデバイスのアーマーの顔に変化はない。女の美貌をシンプルに造形したマスク部分には、表情を変える機能はない。しかしマスクの内側では、静子の顔が困惑していた。
（えっと、やっぱり、皆さんになにか言うべきかも）
スーパーヒーローたちは事件を解決した後に、集まった人々やマスコミに事件について話すことが多い。人々の不安を鎮めるためで、ベテランヒーローになるとためになる言葉をさりげなく言ってのける。サンダークラップスではそういう役は、いつもリーダーのスターサンダーの担当だ。
警官への報告が終わると、顔を人々へ向けた。
「ええっと、その……」
ローズデバイスは無意識に大きく息を吸って告げる。

「皆さん、安全運転をお願いします」
そう口走ってから、自分で突っこんだ。
(なんなの、それ⁉　もっと気の利いたことを言わなくては)
ナノマシンが構成する脳のデータベースを検索して、過去のヒーローたちのインタビュー映像を高速で再現していく。そして決めた。
「それでは、さようなら！」
演説をあきらめて、アーマーを砲弾のように垂直に飛翔させた。
(あああダメダメ！　スーパーヒーローとしてもっと上手くしゃべれるようにならなくてはいけない)
ビル街の上空に浮かぶアタッシュケースに右手を伸ばしたとき、声が聞こえた。
「勇者様！」
「勇者様！」
「お目覚めください、勇者様！」
ふいに静子の耳にいくつもの声が入り、脳内に響いた。
(えっ？　なに？　あたし、まぶたを閉じてる⁉)
閉じた覚えのないまぶたを開くと、目の前に顔が並んでいた。

ぼんやりとした視界に映るのは、見たことがない顔ばかり。全員が男。年齢は四十代以上から老人まで。ひとりとして記憶にない顔が、円陣を組むように並んで静子を見下ろしている。

「目を開けた！」

「目を覚まされた！」

「勇者様が起きられたぞ！」

静子は大きく目を見開き、視界をクリアにする。

「……これは」

自分の声が間延びして聞こえる。顎の筋肉も、舌も、唇も、動きが重い。

「なに⁉」

自分が空を飛んでいるのではなく、硬く平らなものに横たわっていることに気づいた。急いで立ち上がろうとしたが、全身の筋肉も固まっていて、思ったように動かせない。まるで何日も眠っていたようだ。

のろのろと上体を起こして、ゆっくりと立ち上がったところで、あらためて自分がローズデバイスのアーマーを装着していないことを認識した。

（アーマーを着けて、銀座の上空を飛んでいたはずなのに、どうして⁉）

自身の身体を見下ろすと、ガラス工芸店で着ていたライトブルーのワンピースと白い靴に戻っている。

（ケースもない！）

全身を包んでいたアーマーだけでなく、空中で今しもつかむところだったアタッシュケースの存在も感じ取れなかった。目に見えないだけではない。アーマーとアタッシュケースは常に静子のナノマシンの脳とアクセスしている。静子の意図に反して他人が触れたり、移動したりすると、自動的に静子の脳だけに警報を発する。しかし今はアーマーとアタッシュケースとの接続が途切れている。

アーマーを失った静子にできることは、手足を動かして謎の肉体のこわばりをほぐすことだけ。そうしながら自分の周囲を観察した。

静子がいるのは、素朴な木造の四角い大きな部屋だった。手入れは行き届いているが、おしゃれなところはまったくない。百人以上は収容できそうな床には、木製の飾り気のない黒い長椅子がいくつも整然と並んでいる。

静子には古いキリスト教の聖堂のように思えたが、室内に十字架もキリスト像も聖母像もなかった。

そのかわり一方の壁の前に、奇妙な銅像が立っていた。身長が三メートルほどの、ヨー

ロッパの貴族らしい、立派だが、華美な装飾はない堅実な服を身にまとう四十代ほどの男の立像だ。肉体はたくましく、顔は優しい包容力を感じさせる。

ただ顔の左目の位置に、円形のアナログ時計がはまっている。長針が丸く並ぶ数字の12を、短針が9を指していた。

静子を包囲している三十人あまりの男たちは、顔の造形も、聞こえてくる言葉も明らかに日本人だ。それなのに身に着けている衣服が日本人ではない。というよりも現代人のものではなかった。ヨーロッパの歴史映画や異世界ファンタジー映画に出てくる町の平民の衣装に見えた。そして今も静子に向かって、勇者様、勇者様、と連呼してくる。

（もしかしてここはセットで、あたしは知らないうちにロールプレイングゲームの仮装イベントに連れてこられたのかしら？　いえ、そんな馬鹿なことはない。非論理的よ）

静子をかこむ円陣の中から最年長らしい白髪に白髭の老人が進み出て、うやうやしくひざまずいた。顔の皺からあふれる歓喜を神妙な表情で抑えつけて、かすれた声を出す。

「勇者様、ようこそわが町ウォッチランドへおいでくださいました。わたくしはウォッチランドの市長ユドルフと申します。われわれの呼びかけにお応えくださったことを、心より感謝いたします」

敬意をこめて述べる老人の言葉にも表情も、静子は悪意を感じ取れない。警戒心を残し

ながらも丁寧にたずねた。
「ここはウォッチランドというところなのですか？」
老人が真摯な顔と声で応える。
「さようでございます」
「あなたの御名前は本当にユドルフですか？」
「もちろんです。勇者様にどうして嘘を申せましょうか」
「あの、失礼ですが、あなたも、他の人々も日本人に見えますが」
「勇者様の世界ではニホンという国があるのかもしれませんが、わたくしどもは存じ上げません。ここは自治都市ウォッチランドです」
ウォッチランドは、静子が全然記憶にない名前だ。地球上に実在する国名でも地名でもないと思う。
「でも、あなたたちの話している言葉も日本語です」
「それは勇者様がウォッチランドに召喚されたときに、互いに言葉が通じるようにされたのでしょう」
「えっ、今、召喚と言いました？」
「はい。さようです」

日常生活ではまず聞くことも口にすることもない言葉を真剣に語る老人の顔を、静子はまじまじと見つめる。

「あたしを別の世界に召喚した、というのですか？」

「われら市民は聖なる守護者アンクル・ウォッチに願いました」

ユドルフ市長は右手を上げて、壁際の銅像を指し示す。顔にアナログ時計をつけた人物が、この町の守護者ということになる。

「近くウォッチランドを襲う恐るべき災厄から護っていただけるように。アンクル・ウォッチは市民の祈りを聞き届けてくださり、異世界から勇者様を召喚されたのですっ！」

感極まって最後にはうわずった大声になった市長の言葉に、いよいよ嘘は感じられない。それでも静子は素直には信じられなかった。

（そんなファンタジー小説みたいなことが実際に起きるなんて……）

サンダークラップスは過去に、パラレルワールドを自由に横断できるテクノロジーを持つ種族の城に囚われて、ユミエルという別の地球のスーパーヒーローと共闘したことがあった。なので別の世界が存在することは納得できる。

それでも勇者として異世界に召喚されるなどという事態は受け入れ難い。自分はなぜか作られたセットにいて、どういうわけか仮装ＲＰＧイベントに放りこまれた、というほう

がまだ信じられる。
だが、ひとつの事実が、ここが自分の知る日本の中ではないと告げていた。
（脳に通信がなにも入ってこない。ネットに接続できない。ウォッチランドには電波がないわ！）
現代の日本の、いや地球の人がたくさんいる場所で、人工的な電波がまったくないのは考えられない。電子的静寂が、静子に自分が世界から切り離されたと感じさせる。
（アーマーも情報も失ったら、あたしにはなんの能力もない。脳をナノマシンと入れ換えただけの一般人なのに、異世界に召喚された勇者と言われても……）
ユドルフ市長が立ち上がり、両手をふるって静子をかこむ人の輪を左右に広げた。アンクル・ウォッチの教会の中に、扉へとつづく道ができる。
「さあ、勇者様。教会の外で待つウォッチランドの市民たちにも雄姿を見せてあげてください！　おお、そうでした。わたくしとしたことが大変なことを忘れておりました」
ドキッとして静子はたずねた。
「な、なんですか？」
「まだ勇者様の御尊名を受け賜わっておりません」
「それは……」

どうしてもためらってしまう。素性を隠して活動しているスーパーヒーローとしての反応だ。

（この状況で、名前を明かしていいのかしら。でもここが異世界だとしたら、この人たちはローズデバイスを知らないから）

決意して、本名を口にする。

「あたしの名前は静子です」

ユドルフだけでなく周囲の人々がどっと湧き上がった。

「シズコ様！」

「シズコ様！」

「われらが勇者はシズコ様だあ！」

「さあ、シズコ様。外で市民たちが、勇者様をお待ちしております」

静子の右手を、ユドルフが握った。何度もくりかえされる自分の名前のなかを、市長に先導されて、静子は前へ足を進めた。何人もの男が我先に走って、木製の大きな扉を押し開く。

扉の外へ出た途端、大歓声が圧力となって押し寄せてくる。静子の目に入ったのは、教会の前の石畳の広場にぎっしりと集まった男女の群衆。老人から両親に抱かれた赤ん坊ま

で、年齢もばらばらだが全員が日本人顔だ。
「勇者様！」
「勇者様だ！」
「勇者様が来てくれた！」
「これでウォッチランドも安泰だ！」
さらにユドルフから静子の名が伝えられると、全員の口から連呼された。
「シズコ様！」
「勇者シズコ様！」
「シズコ様、われらをお救いください！」
「ウォッチランドを護ってください、シズコ様！」
大勢の人々の言葉にあふれる希望の音色を、静子は鮮明に感じ取れた。スーパーヒーローとして事故や災害の現場で救助活動をするときに、何度も聞いた音色だ。この異常な状況にあっても、ウォッチランドの人々の言葉に嘘はないと思う。
（でも、今のあたしが、どう応えてあげればよいのか……）
自分に向けられる大きな期待に困惑しながらも、静子は冷静にウォッチランドを観察していた。群衆で埋まった広場の周囲には、木造や石造りの家が並んでいる。どの家も平屋

か二階建てで、アンクル・ウォッチの教会が最大の建物だった。

見える限り、街のなかには、電線、街灯、自動車、列車、その他現代のテクノロジーを感じさせるものはない。やはり町全体が歴史映画のセットのようにしか見えなかった。

しかし連なる家並みの向こうには、リアル志向の歴史映画には有り得ないものがそびえ立っている。

城壁だ。

遠くて細部はよくわからないが、石造りの城壁が町をかこんでいる。城壁の中に町がある城郭都市は、ヨーロッパでは珍しくない。現代にもいくつも残っている。だがウォッチランドの城壁はサイズが異常だった。正確なところはわからないが、静子は建物との比較で目測してつぶやいた。

「城壁の高さが六十メートルはある！」

有名な万里の長城の最も高い部分でさえ九メートル。現存する城郭都市のなかでも最大規模であるフランスのカルカソンヌでも、城壁は十数メートルの高さ。高さ六十メートルの垂直にそびえる城壁を建設する技術は、目の前のウォッチランドとは隔絶している。

（まるでオーパーツだわ）

静子は歓声をあげつづける市民たちへ、できるかぎりの大声で叫んだ。

「ウォッチランドの皆さん、すみませんがお静かにお願いします。あたしの話を聞いてください！」
静子の精一杯の音量は、あっさりと観衆の叫びにかき消されてしまう。
「あ、あの、皆さん、ちょっと……」
いつもは完全に素の自分を隠蔽しているからこそ、堂々とスーパーヒーローとしてふるまえる。素顔と素の声でヒーローじみたあつかいをされるときが来るとは、想像もしていなかった。
「お願いしまーす。あたしの話を聞いてくださーい！」
人生ではじめて機械で増幅しない大声を二度三度とくりかえして、ようやく市民たちが鎮まってくれた。歓声のかわりに、偉大な救世主からどんなありがたい言葉を賜われるのかという熱い期待の視線が、レーザーの一斉照射のごとく飛んでくる。静子は自分の頬が赤く色づくのを自覚して、うわずった声を出してしまった。
「あの、あたしは勇者として召喚されたそうですが、事情がまったくわからないんです。皆さんのお役に立つためにも、あたしがなんのために召喚されたのか、具体的に説明してもらえないでしょうか」
静子の前で再び市民はざわつきはじめる。老若男女が顔を見合わせては、また視線を静

子へ向けてきた。

（ああっ、失望されているみたい。勇者はなんでも知っていると思われているのかしら）

今度はユドルフ市長が両手を広げて、民衆を制した。

「まあまあ。市庁舎の公文書庫にある記録によれば、代々の勇者も召喚されたときには何も知らなかったという。シズコ様も」

いきなり大音響が轟き、市長の弁舌がかき消された。

静子は驚愕の声をあげる。

「あああああっ！」

静子の目に映る広場の群衆と立ち並ぶ家々の向こうで、凄まじい光景がくり広げられた。そびえ立つ巨大城壁の一角が、内側へ向けて崩壊している。いくつも大きな石の塊が落下して、壁際に建つ家を押しつぶす。住民が広場に集まっていなければ、下敷きになって死人が出たかもしれない。

見る間に城壁の崩壊が広がり、次々と家屋が粉砕されていく。六十メートルの巨壁の一部がUの字の形にえぐられた。

壁の向こう側から崩れた箇所を乗り越えて、黒いものが姿を現した。黒い蛇のように長く伸びた首。黒い胴体から生えた四本の脚。そして背中から広がる黒い翼。静子は印象を

口にした。
「ドラゴン⁉」
最初に壁を乗り越えたものは、確かにドラゴンの姿。大きさはトラックほどもあるだろうか。だがその後につづく黒いものは、同じ大きさだが全身にトゲトゲが生えたクワガタムシに見える。さらに脚のある黒い怪魚。三本の首をもたげた黒い大蛇。ねじれた角が生えた黒い狼のような獣。
怪物の群れの姿とともに、ナノマシン脳が今までウォッチランドに存在しなかった電波を検知した。
（どういうこと？）
後ろをふりかえった広場の男も女も、老人も子供も、全身の血を搾り取られたように蒼白な顔になり、悲鳴と怪物たちの名前をほとばしらせる。
「ひいいいいい！」
「恐るべき群団（ドレッドホード）だ！」
「ドレッドホードがもう来たっ！」
「伝承では、来るのはもっと後なのに！」
黒い怪物の群れは続々と城壁の残骸を越えて、ウォッチランドの中に入りこみ、様々な

形状の手足や巨体そのもので無人の家を破壊して、踏みつぶし、瓦礫へと変えながら、教会へと突き進んでくる。

ドレッドホードの破壊の苛烈さを見るだけで、ウォッチランドの近代兵器を持たない人々がかなう相手ではないとわかる。人間は簡単に叩きつぶされ、引き裂かれ、殺されてしまうだろう。

市民たちが恐怖に絶叫して、逆に恐怖に声を失って、静子の背後へまわり、そのままアンクル・ウォッチの教会の中へ駆けこんでいく。民家より大きいとはいえ、木造の教会が黒い怪物の群れに対する防壁になるとは思えない。

何人かの男たちが教会の中に入らずに、入口の前で自分たちこそが家族の防壁になろうと立ち止まった。

男たちの決死の壁の前で、静子はその場から動かずにいた。今の自分に闘う力はない。自分を勇者と信じている人々よりも肉体は弱いだろう。非常時のために護身術を習ってはいるが、この状況でなんの役にも立たない。

それでもスーパーヒーローの自覚がある。自分が伝説の勇者ではなくても、人々を護らなくてはいけない。

（この状況では、人が一か所に固まっていては被害が大きくなるわ。ばらばらに逃げたほ

うが、被害を少なくできる可能性が高い。あたしが率先して逃がさないと）

思案している間にも、家々を破壊して黒い怪物たちが迫ってくる。静子は決意して市民たちに声をかけようとしたとき、教会の三角形の屋根の一部がスライドした。開いた空間からアンクル・ウォッチの銅像が姿を現した。

高さ三メートルの聖者の銅像が足下の直方体の台座ごと、教会の屋根の上に浮かんでいる。ウォッチランドの住人でなくとも、奇跡が起きたと信じるような光景だ。

しかし静子のナノマシン脳は、台座の中で今まで眠っていた機械が起動していると検知した。

（ウォッチランドに高度な技術がある！　魔法ではなく、失われたテクノロジーなの!?）

アンクル・ウォッチ像は空中を素早く移動して、静子の前の地面に着地した。間を置かず銅像がバラバラと分解しはじめる。

皮を剥ぐように崩れ落ちた聖者の内側から、別の立像が出現した。

甲冑だ。

ヨーロッパの中世に流行した馬上槍試合（ジョスト）の競技者が装着するような、金属の兜（ヘルム）と鎧（アーマー）で全身を覆うタイプの甲冑。

だがシルエットは細く、胸の丸いふくらみや、ウエストのくびれは、完全に大人の女の

プロポーションを再現している。兜の前面の、装着者の顔を隠す面頬（バイザー）も女らしいほっそりした仮面だ。

静子のローズデバイスアーマーに雰囲気は近いが、シンプルな曲面で構成されたデザインのアーマーに対して、甲冑は勇猛かつ華麗なイメージの装飾が施されている。色も煌びやかな深紅と青と白に彩られて、神々しい輝きをまとう。

さらに背中に純白のマントが伸びて、大きくひるがえった。まさにいろんな物語に出てくる聖なる勇者の姿だ。

静子のすぐ後ろに踏みとどまっているユドルフ市長が、膝をついて感嘆の声をあげた。

「おおお、勇者の恩寵（ブレイブグレース）！　先代の勇者様がお使いになられたという鎧が、アンクル・ウォッチ様の像の中に隠されておったとは！」

市民たちと同じように驚きの顔で見つめる静子の前で、台座が回転してブレイブグレースが背面を見せた。自動的に白いマントがはずれて、甲冑の足下の台座に落ちた。現れた甲冑の後ろ姿は、背中の優美なラインも、むっちりと張った尻も、やはり女らしい造形を見せつける。

甲冑の後ろ側の兜（ヘルム）の後頭部と首、背の装甲（バックプレート）と尻当て（キュートレット）が複雑に分割されて、蕾（つぼみ）がほころぶように開いた。内側にはスペースがあり、表面は静子も知らない柔らかそうな材質になっ

ている。

（伝説の鎧と言うけれど、明らかに機械だわ。それもかなりの高度なテクノロジーの産物。あたしが勇者に選ばれて、召喚されたのは、ブレイブグレースというアーマーを装着するため!?）

初見の未知のアーマーをいきなり装着するなど、どう考えても危険すぎる。

（それでも、やるしかないわ！　どれほど危険なことでも、人の命を護るためなら、フレアも、スターサンダーも、オセロットも、ためらわずに挑んでいくはず）

静子は素早くワンピースと靴を脱ぎ捨て、黒いボディスーツ姿になると、台座に駆け上がった。足の下にマントの柔らかい布を感じる。

（出現してすぐにはずすのなら、どうしてマントをつけていたのかしら？　そもそもマントは必要なものなの？）

サンダークラップスのメンバーで唯一コスチュームにマントがあるフレアに聞きたくても聞けないでいる疑問を浮かべながら、甲冑の開いた尻の部分に足をかけて、身体を中に滑りこませる。

両脚がブレイブグレースの腿当て（クウィス）の空洞に入り、両腕を甲冑の腕（カノン）の中に挿しこむ。顔を兜の面頬の裏側に当てると、自動的に背面の装甲がパタパタと閉じて、ジグソーパズルさ

ながらにぴっちりと組み合わさる。
全身に柔軟な物質が貼りつき、あつらえたように静子の身体にフィットする。
静子自身が作ったローズデバイスアーマーはナノマシンの脳にリンクして、アーマーを自分の肉体として認識できる。装甲は自分の皮膚であり、各種センサーは自分の感覚器になり、動力機構は自分の筋肉と化す。アーマーから直接脳に送りこまれてくる人間の五感以外の情報を処理できるのも、ナノマシンの脳のおかげだった。
ブレイブグレースにその機能はない。VRのように目の前に映像が現れるだけだ。
その映像にブレイブグレースに関する情報が構造図と日本語の文字で現れ、耳にも日本語の音声の解説が聞こえた。
（あたしの動きと周囲の状況を判断して、ブレイブグレースが最適な活動をするのね。特別な指示は声ですればいい）
眼前の映像から文字が消えて、広場に面した家を突き崩して出てくる黒いドラゴンの頭部が映った。
闇を凝り固めたような光沢のない黒い頭。開いた口の中も黒く、黒い牙の列が並び、黒い舌が蠢（うごめ）いている。唯一、眼球だけが黄色く発光して、得体の知れない意志を感じさせた。
「皆さん、下がってください！」

甲冑の中で叫んだ静子の声が、ブレイブグレースから大きく轟いた。台座とマントを蹴り、ドラゴンへ向かって跳躍する。高々と空中を翔けながら手足を動かすと、ほとんど抵抗は感じない。動きやすい最高のスポーツウェアを着ているような感触だ。

「武器を出して」

つぶやくと、広場の石畳の一部がスライドした。開いた穴から剣が矢のように飛び出し、空中で軌道を変えて、柄(つか)が甲冑の右の籠手(ガントレット)に収まる。

ブレイブグレースが持つにふさわしい華麗な装飾が施された柄から伸びる剣身は、三メートルあまりある。通常の人間以上の身体能力を持つオフビートでもなければ、屈強な大男でも持ち上げることは難しい重量の大剣だ。

しかし静子は軽い棒を握っている感触しかなかった。長大な剣の重量は、甲冑が巧みに吸収して、中の装着者の負担にならない機構になっている。ローズデバイスアーマーにも同じシステムがあった。

自身が作った瓦礫を四本の太い脚で踏みしめて、翼を広げた黒い胴体が広場に侵入した。

「このっ！」

静子は剣道や剣術の経験がない。ローズデバイスはアーマーに内蔵した多数の武器を駆使して闘う。習っている護身術も、剣を使うことはない。ブレイブグレースは大重量の剣

を頭上に振り上げ、真正面からドラゴンへ向けて叩きつけた。重さと遠心力は甲冑が引き受ける。狙いもブレイブグレースが補正してくれた。

剣身がドラゴンの眉間に激突し、ぶち割った。頭部が二つに割れ、長い首が縦に裂け、胴体の前半分が切り開かれた。

ドラゴンの動きが止まり、その場で崩れた。

裂けた胴体から血液は流れなかった。内臓もあふれ出ない。断面から見えるのは複雑に絡まり合う機械。

「ロボット⁉」

隣の家を突き破って、巨大クワガタムシが飛び出した。チェーンソーのように振動する二本の大顎が、ブレイブグレースを挟もうと迫ってくる。

「飛んで！」

とっさに静子が叫ぶと、甲冑の足の下からジェットを噴射した。大顎が閉じる寸前にブレイブグレースが飛翔する。そのまま身体をひねり、回転して、剣をクワガタムシの頭部と胸部の境い目に叩きつける。

金属音を響かせて、頭部が切断された。広場に転がる虫の頭から金属の部品がばらまかれて、石畳がカンカンッと硬い音を鳴らす。

「ドレッドホードはロボットなの⁉」
ウォッチランドに侵入してきた怪物たちがロボットならば、突然電波を感じた理由もわかる。ドレッドホードたちが互いに通信し合っているのだろう。
「はっ！」
警報が鳴り、目の前の映像に背後の教会が映った。空から屋根へ向かって、黒い怪鳥が急降下してくる。
「だめっ！」
ブレイブグレースが大剣を投擲する。ミサイルのごとく飛んだ剣先が、巨鳥の胸を深々と貫く。胸から青い火花を噴き上げ、軌道を変えて石畳に頭から激突した。
「別の武器！」
静子が叫ぶ。石畳の別の一画から、槍が飛び出した。ブレイブグレースが走りながら槍をつかみ、空気を裂いて足の生えた怪魚へ突撃する。
怪魚の二つの眼球の間に、穂先が突き刺さった。
「次の武器！」
倒れ伏した怪魚の腹を突き破って、鉄の塊じみた斧が現れる。長剣以上に人間に持てそうにない巨大な斧を、ブレイブグレースが軽々と構えた。左右から襲いかかってくる黒い

狼と三つ首の大蛇の間を高速で駆けて、狼の胴体を叩きつぶし、大蛇の頭をすべて破壊する。

頭上から落ちてきた大ガエルをかわしたが、斧を呑みこまれた。即座に武器を呼ぶと、今度はハンマーが飛んでくる。柄を握った勢いのまま、カエルの脳天にハンマーの先端を振り下ろした。カエルの頭が深く窪み、左右の眼孔から大きな眼球が飛び出して、コードを引いて転がっていった。

静子は新たに現れた弓を手にすると、鋼鉄の銛（もり）のような矢を次々と上空へ放ち、空を飛ぶ怪物たちを続々と射貫いた。

矢をすべて撃ちつくすと、弓を背後に迫った黒いカマキリの胴体の側面に打ちつける。カマキリの胴体がくの字に折れ曲がり、その場で鎌と脚を踊り狂わせながら横倒しになった。

そして。

そして。

そして……。

新たな黒い怪物の襲撃が途切れて、何分も過ぎた。見渡せば、広場には静子が破壊したドレッドホードの残骸が大量に散乱している。怪物がまた出現すれば甲冑が自動で知らせ

てくれるので、静子はひとまず倒した怪物を調べた。
生物ではなく、作り物なのは間違いない。見たところ静子の理解の外にある魔法の産物ではなく、科学技術が造りだした機械だ。
（ブレイブグレースといい、ドレッドホードといい、ウォッチランドの技術レベルをはるかに超えているわ。この世界では過去に高度な科学技術があったけれど、文明が崩壊して、忘れ去られてしまったのかしら。だとするとブレイブグレースとドレッドホードは失われた過去の文明の遺産。あたしを銀座からこの世界に召喚したのも、魔法ではなく、次元を超えるほどの高度な科学技術かもしれないわ……）
静子がブレイブグレースを装着したまま残骸の調査をつづけていると、周囲に人々が集まってきた。教会に隠れていた子供たちが甲冑に手を触れて、口々に感謝の言葉を告げる。
「ありがとう、シズコ様」
「ありがとうございます、シズコ様」
「シズコ様は命の恩人です」
「感謝します、シズコ様」
子供たちだけでなく、大人たちも、老人たちも、感謝の声を大きくしていき、やがて勇者を称える万歳の合唱へと昇華した。

媚薬粘液でぬらつく亀頭が、狭い女の道を広げて進む。黒い肉幹が深々と突き刺さるが、すべてを体内に呑みこむには長大すぎる。

「ううんく、こ、ここまでしか入らない……」

肉幹の付け根から数センチの位置で、静子の動きが止まった。尻が猪の背から浮いてしまう。大きく広げられた膣口に漆黒の肉幹が突き刺さっている姿が、ウォッチランドの人々にはっきりと見えている。

「おお、シズコ様……」

「なんということだ」

「わたしたちの勇者様が……」

住民が口々に洩らす言葉が、静子の鼓膜を撃つ。その痛みも、下半身からマグマのごとくせり上がってくる熱い快感に打ち消された。

「ああう……ふあああああ、いやあああ！」

金属のペニス自体は冷たく、動かない。しかし女肉で硬質の勃起を包んでいるだけで、ズキズキと喜悦のパルスが脈動する。

もちろん、ずっと静止していられるはずがなかった。テラーロードが首輪の鎖を引き、静子の身体が前に傾くと、猪が四本の脚をスキップのように動かして前進した。

「あひっ！　ひいいいっ！　そんなあっ！」

わざと巨体を揺さぶって歩く猪の背中で、静子の全身がガクンガクンと踊らされる。ずり落ちないのは、ブレイブグレースの脛当て（グリーヴ）が磁石のように猪の胴体にくっついているからだ。

グチュッ！　ズチャッ！　ギュチチチッ！

静子の半裸身が上下に跳ね、前後左右に振りまわされるたびに、股間から濡れた摩擦音が連続して奏でられる。

「あっおおう！　ふわあああ！　ダメッ！　おかしくなっちゃううっ！」

媚薬に侵蝕された官能が暴走する。猪が十メートル進んだだけで、静子は限界に達した。

「くっおおおおうううう……んんんっ……」

絶頂の言葉が出そうになり、下唇を噛んで抑えつけ、胸の内だけで叫ぶ。

（イクッ！　イクう！　イッちゃうう!!）

「静子、口を開け！　勇者を崇拝するウォッチランドの奴らに、恥をさらす大声を聞かせてやれ！」

テラーロードの声が再び東アンクル・ウォッチ大通り全体に轟いた。静子を乗せる猪の牙が長さを伸ばして、鋭い先端が近くの青年の心臓へ迫る。静子は決意して、下唇を噛む

前歯を離した。抑えつけていた叫びが一気に解き放たれる。
「イクッ！」
静子が絶頂を訴える叫びが、東アンクル・ウォッチ大通りに響き渡り、並んだ市民たちの耳を叩いた。近くにいる住民だけでなく、ドレッドホードが中継して町中からエクスタシーの宣言が轟いた。
「イッチゃふううううう――――――――ううううッッ!!」
ビシャヤヤアアアアッッ！
黒い剛直を咥える肉孔から、愛液が盛大にしぶいて、猪の鋼鉄の背中を濡らし、胴体の左右を流れ落ちて、路面に滴る。静子がたてる屈辱の水音すら、黒い機械の獣たちが増幅して広めた。
テラーロードがまた鎖を引き、猪がエクスタシーで痙攣する静子を乗せて跳ね進む。一度開いた口と喉はもう閉じられなくなり、スーパーヒーローにも勇者にもあるまじき言葉が止めどなく搾り出されてしまう。
「はひっいい！　まだイッてるのに、うっ、動いたらあ、ひゃいいいいッ！　もっとイッちゃうううッ！　イクイクイクううう――――――ッッ!!」
恥辱の行進がつづき、静子は絶頂の上に新たな愉楽を積み重ねていく。猪が脚を踏み出

すたびに、静子の股間から流出する愛液が、路面に落ちる。
「またイクッ！　イクの止まらなひいっ!!」
「もっと勇者がイク姿を見てもらえるように、静子からみんなにお願いしないか！」
テラーロードの叱責に、静子は不自由な上体を揺らして、随喜の汗に濡れた美貌を右に左に向けて、男に、女に、子供に、大人に、老人に、よがり声混じりの懇願をしていく。
「はっあああ、お願いです！　おひいい！　イクうっ!!」
ブシャア――――ッ！　ドプドプ！
「どうか、静子がイクところを見てくださひい！　イクんんっ！」
ビシュッ！　ジュバッ！
「あっおおおう、見て！　静子がイクのを見てええっ！　またイクふああ!!」
ジョプッ！　ドビュウウ！
「見て見て見てへえ！　静子、イッちゃううのおおおッッ！」
シュババババ――――ッッ！
東アンクル・ウォッチ大通りを半分も過ぎたときには、静子の意識は朦朧（もうろう）としていた。
際限がないように積み重なりつづける肉の悦楽と、ウォッチランドの住民の同情の視線と悲嘆の声、そして自らが流す水音だけが、脳に刻まれていく。後に意識がはっきりすれば、

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

正義のスーパーヒーローチームの原点！
二次元ドリームノベルズ
サンダークラップス！
淫獄の四天使
小説：羽沢向一
挿絵：カワギシケイタロウ
全国書店、各電子書籍サイトにて好評発売中！
シリーズ作品の電子書籍版も
好評配信中！

正義のスーパーヒーローチームが帰ってきた！

二次元ドリームノベルズ

サンダークラップス！リボーン シリーズ

THUNDER CLAPS! REBORN

羽沢向一 挿絵：緑木邑

各電子書籍サイトにて
各巻好評発売中！